

*Macbeth*における言葉の魅力について

—韻律と修辞法の観点から

古庄 信

Abstract

The main purpose of this thesis is to investigate one of the most noticeable rhetorical usages which is often found in Shakespeare's works, i.e. 'repetition'. In this paper, we handle Shakespeare's *Macbeth* (MAC) as our corpus, where we can discover as many repetitive examples as in the other works we have researched. But not only the repeated words or phrases, we can also find another different factor when we read or hear the lines of the witches. These lines are written by 'trochaic tetrameter', which seems to give us some special feeling of the witches' world, because of its unique rhythm with the initial strong accents and the following weak ones. So we will examine when and how these meters are used, and what effect they give us, as well as analyzing the repetitive usages.

はじめに

シェイクスピアの作品群において、その言葉の魅力を支える要因のひとつにレトリック（修辞法）が起因していることをこれまでの拙論¹⁾において論述してきたが、*Macbeth*（以下MAC）においては他の作品と共通の修辞法が見られる一方で他とは異なる要素も用いられている。たとえば登場人物の中に人間以外の「魔女」が登場し、主人公Macbethの運命を支配する重要な役割を演じているが、その魔女たちのセリフをシェイクスピアは、通常のblank verse（弱教五歩格）とは異なるtrochaic tetrameter（強弱四歩格）で表現しており、その詩行のリズム（韻律）²⁾の違和感が魔女たちの異界の独特の世界観を伝えるのに貢献している。また他の作品群同様、MACにおいても、'tomorrow speech'³⁾をはじめとした名台詞がいくつも見られるが、本論ではこの作品におけるシェイクスピアの言葉の魅力、韻律と修辞法という観点から分析してみたい。

今回の調査においてMACをテキストとして取り上げる理由として、2012年5月に著者の勤務先である学習院女子大学において英国劇団ITCLの*Macbeth*公演が行われたこ

と⁴⁾、またそれに伴い複数の担当授業においてこの作品を教材として取り上げたこと、そしてそれによって、上述したように他の作品とは異なるセリフのリズムの発見があり、これについても他の修辭的手法と合わせて観察・分析する必要性が再認識されたこと、などによる。

分析の方法・手順としては、これまでと同様、作品中のすべてのセリフをrhyme、alliteration、repetition他の修辭法に従って分類を試みるが、この作品を観察するうえで注目された韻律や、随所に用いられていると思われる比喩表現、特に今回はsimileとmetaphorの使用についても注目してみたい。Simileやmetaphorは一般的によく用いられる手法ではあるが、注意して読むとMACにおいては特に多用されているように思われる。また韻律については、特に上述の強弱四歩格の部分と弱教五歩格によって生み出されるリズムの差に注目したい。

1. 魔女のセリフにおける詩のリズム

MAC1幕1場は魔女たちの「Macbethとの出会いの予言」によって始まる。この場面の魔女たちのセリフはシェイクスピアが通常用いる‘iambic pentameter’（弱教五歩格）のblank verse（無韻詩）とは異なり、以下の例に示すように‘trochaic tetrameter’（「強弱」四歩格）によって構成されていることがわかる⁵⁾。（例文中の・と×は各々「強」と「弱」のアクセントを示す。）

- (1) *Witch 1.* Whén sháll wé thrée méet ágáin?
 In thúnder, lightnng, ór in ráin?
Witch 2. Whén thě húrley-búrly's dóne,
 Whén thě báttle's lóst and wón.
Witch 3. Thát will bé éra thě sét of sún.⁶⁾
Witch 1. Whére thě pláce?
Witch 2. Úpón thě héath.
Witch 3. Thére tó méet wíth Mácbehth.
Witch 1. Í cóme, Graymálkín.
Witch 2. Páddóck cálls.
Witch 3. Ánón.
All. Fáir is fól, and fól is fáir,
 Hóvër thróugh thě fóg and filthý áir.

(MAC 1.1.1-11)

以上のように、×・という弱強が各行で各5回繰り返される‘pentameter’とは明ら

かに異なる強弱各4回の繰返し(正確には強4回、弱3回を主とする)はこの場面の他に(i) 1幕3場1行～37行、(ii) 3幕5場1行～35行、(iii) 4幕1場1行～38行および(iv) 103行～132行(の間に部分的)において魔女たちのセリフとして用いられている。

2つめの指摘として、これは述べるまでもないが、1幕1場1行～11行の例(1)では2行ごとに脚韻を踏む、いわゆるcouplet形式のrhymeとなっており、これもまた魔女たちのセリフに独特の響きを与える要因と考えられ、上で挙げた(i)～(iv)の各例でも同様である。これらの各例はここでは省略する。

さらに(1)の例で注目すべき点として、11行目だけが他の行より強のアクセントがひとつ多い五歩格となっている。この理由として、次のようなことが推測される。この11行目の五歩格でこの場面が終り、次の1幕2場がDuncan王のセリフで始まる。王のセリフの冒頭は次のようである。

(2) *Duncan.* What bloody man is that? He can report,
As seemeth by his plight, of the revolt... (MAC 1.2.1-2)

このようにDuncan王が血まみれの使者を見て吐く驚愕のセリフは弱強五歩格で始まっている。すなわち1.1.11の五歩格は次の場面でDuncan王(すなわち人間)のセリフが弱強五歩格で始まることの前触れ、そして魔女の世界とは全く別の人間たちのセリフが異なるリズムで語られ始めることのシグナルを観客に送るものとして用いられている。すなわち1幕1場11行は強弱四歩格から弱強五歩格へとリズムの変わり目を滑らかにつなぐ働きをしているのである。通常、脚韻のないblank verseにおいて、一人の登場人物のセリフにおける脚韻のcoupletが2～数行続いて発生することで、その場面が終り、次の場面へと移ることを知らせる用法と同じであると考えられないだろうか。

2. Simileとmetaphor

次にsimileとmetaphorについて観察した結果を述べる。

「(A is as …as B [like B])の形式で比喩を表現する⁷⁾」 simile(直喩または明喩)は本作品では32例見られる。Asに導かれる例が15、likeの例が16、ofの例1である。本文末のfrequency survey(以下FSと標記)を見れば明らかなように、asとlikeの各例はたとえば1のasの後2、3がlike、その後asが4～9と続き、likeがその後10～15…のように複数例が交互に発生していることがわかる。但しこれについて法則性のようなものはないように思われる。以下、asとlikeの代表例を挙げる。

(3) *Sergeant.* **As** sparrows eagles; or the hare the lion. (MAC 1.2.35)

(4) *Banquo.* A heavy summons lies **like** lead upon me, (MAC 2.1.6)

またlikeについてはShakespeareらしい名詞と合体した例も見られる。

- (5) *Macbeth*. But **bear-like** I must fight the course. (MAC 5.7.2)

「A is Bの形式で比喩を表現する」⁸⁾ metaphor (隠喩) については34例が見られる。(FS参照) これらのうち例数は4と少ないが、simileと並行して用いられているのが興味深い。すなわちsimileによって導入される比喩表現をmetaphorの表現につなぐことで、表現をより深く、豊かにし、また観客により印象づけるための手段とも考えられる。

- (6) *Lady Macbeth*. ...look **like th' innocent flower**,
But **be the serpent** under't. (MAC 1.5.65-66)

- (7) *Rosse*. Thou seest the heavens, **as troubled with man's act**,
Threatens his bloody stage. By th'clock 'tis day,
And yet **dark night strangles the travelling lamp**.
Is't **night's predominance**, or **the day's shame**,
That **darkness does the face of earth entomb**,
When **living light should kiss it**? (MAC 2.4.5-6)

例(6)中の'innocent flower'や'the serpent under't'は旧約聖書・創世記におけるイブの原罪を容易に喚起させ、'snake' (3.2.15-15) 'scorpions' (3.2.36) のような、いわゆる人間にとって邪悪な生き物⁹⁾がMacbeth自身やMacbethが憎むBanquoに対する比喩に用いられていることで<snake=Macbeth=evil>のようなイメージが聴き手である観客の脳裏にも容易に浮かぶであろう。このことはThompson¹⁰⁾も指摘しているとおりである。しかし本作品における最も有名なmetaphorといえやはり'tomorrow speech'中の以下の例を挙げるべきであろう。

- (8) *Macbeth*. **To-morrow**, and **to-morrow**, and **to-morrow**,
Creeps in this petty pace from day to day,
...
Life's but **a walking shadow, a poor player**,
That **struts and frets his hour upon the stage**,...
(MAC 5.5.19-20/24-25)

ここでは'tomorrow' (すなわちtime) が'creep' (=move slowly or feebly) する¹¹⁾

と喩えることにより、時が生き物のように ‘in this petty pace’ (小刻みに、あるいは弱々しく) しかし ‘from day to day’ (刻一刻と) 確実に歩み、過ぎ去る、また ‘Life’ (人の一生) は「舞台の上では騒ぎ立てる愚かな役者と同様、袖に引っ込めば (= 死ぬと) 沈黙>すなわち (死に向かい) 歩き去る影」と、Shakespeareは逃げ場を失ったこの場のMacbethの焦燥、絶望、あきらめといった気持ちをみごとに「時の無常さ、むなしさ」に喩えて表現している。

3. Rhyme

1の例(1)に見られたように、MACにおけるrhyme37箇所(184行)のうち124行、すなわち大半が魔女やHecateによって語られるセリフに用いられている。(各例については本文末のFS参照。) またその他の例もほとんどがrhymeで語る登場人物の退場(*exit/ exeunt*)のサインとして用いられている。ただし例外的に登場人物のrhymeのセリフに続いて他の人物が登場する際のサインとして用いられている例も4か所ほど見られる。例えば1.4.20-21、3.2.6-7、4.1.41-42、5.3.9-10などである。(各例については本文末のFS参照。) 脚韻の頻度としては、前回調査した*Othello*よりはるかに多く¹²⁾、しかし*Henry the Sixth* 三部作や*Winter's Tale*と比較すればほぼ同じ割合といえる。

- (9) *Witch 2.* Cool it with a baboon's **blood**,
Then the charm is firm and **good**. (MAC 4.1.37-38)

この魔女2のrhymeに続いてHecateが登場、さらにその後再び魔女2のrhyme (‘locks’ /knocks’, 4.1.46-47) に続いてMacbethが新たな予言を訊くために登場する、という具合である。また例(9)の‘blood/good’のrhymeは現代英語では韻を踏まないがShakespeareの時代がGVS¹³⁾の真只中であったことを証明する音韻論的証拠ともなっている。‘bear/fear’ (MAC5.3.9-10)の例も同様。

4. Repetition

修辭法の様々な用法において最も高い頻度で現れるのは、やはりrepetition「反復」である。MACにおいても合計で188例が見られた。反復の回数で見れば2回の反復が108例、3回が60例、4回が12例、以下5回、6回が2例ずつ、8回が3例、9回が1例という状況である。2回は「反復」の最低条件であるので当然用例数も多いことが予想されるが、3回の反復が全体の三分の一という高い頻度で発生していることを今回も強調したい。また反復例の要素を品詞別に頻度の高い順に見るならば、動詞句の例が最も多く52例、名詞句が40例、動詞と名詞が各24例、形容詞が18例、感嘆詞が14例、文単位の例が11、その他、副詞、前置詞、擬音 (onomatopy) などが一例ずつ、という状況である。ここで

は動詞句、名詞句その他3回の反復例を代表としていくつか挙げる。

- (14) *Hecat.* He shall **spurn fate, scorn death, and bear**
His hopes 'bove **wisdom, grace, and fear;** (MAC 3.5.30-31)
- (15) *Macbeth.* “**Sleep no more!**” to all the house;
“Glamis hath murther'd sleep, and therefore Cawdor
Shall **sleep no more**—*Macbeth* shall **sleep no more.**” (MAC 2.2.37-40)
- (16) *Malcolm.* **What I believe, I'll wail,**
What know, believe; and **what I can redress,**
As I shall find the time to friend, **I will.** (MAC 4.3.8-10)
- (17) *Doctor.* Look **after her,**
Remove **from her** the means of all annoyance,
And still keep eyes **upon her.** (MAC 5.2.75-77)
- (18) *I Apparition.* **Macbeth! Macbeth! Macbeth!** Beware Macduff.
(MAC 4.1.71)

名詞の3回の反復例としてはこれ以外にも2の(8)に見られたように‘tomorrow speech’の冒頭の例なども挙げられる。(8)も(18)もともに‘Mac-béth’、‘to-mór-row’のように2音節目に「強」のアクセントがあるため、iambic pentameterの一行中でうまくリズムをとりながら用いられている。(14)は正確にはparison¹⁴⁾の例として処理すべきだが、1例のみということでrepetitionのヴァリエーションとしてここに加えている。

さらに韻文だけでなく散文においてもShakespeareは「反復」を用いてリズムカルなセリフを生み出している。例えば2幕3場で門番は30行を超える長セリフ中で、‘Knock, knock, knock!’ (MAC 2.3.3; 2.3.12)と擬音を繰り返したり、夢遊病のマクベス夫人は‘To bed, to bed, to bed.’ (MAC 5.1.68)と繰り返して退場するなど、3回の反復例が頻繁に用いられている。全用例の発生箇所については本文末のFSを参照されたい。

5. Alliteration

頭韻はMAC全2,146行¹⁵⁾の中で、blank verseの1,830行とrhymed verseの174行、合計で2004行において49例が見られた。うち37例が1行に2回、12例が3回という発生率であった。また頭韻の発生環境は多い順に/s/:9例、/b/:7例、/d/:7例、/l/:5例、/g/:4例、

/m/ : 3例、/t/ : 3例、/j/ : 2例、/p/ : 2例、/ð/ : 2例、/au/ : 1例となっている。さらに頭韻を起こす品詞の組み合わせを見ると、例(10)や(13)に見られるように「形容詞＋名詞」が15例と最も多く、「名詞＋名詞」が8例、「動詞＋動詞」が7例、「名詞＋形容詞」が3例、残りは「動詞＋副詞、前置詞」その他となっている。個々の例の発生箇所についてはFSを参照されたい。以下、代表例を4例挙げておく。

(10) *Sergeant*. The **merciless Macdonwald**... (MAC 1.2.9)

(11) *Lady Macbeth*. ...and you shall put
This night's great business into my dispatch,
Which shall...
Give **solely sovereign sway and masterdom**. (MAC 1.5.70)

(12) *Lennox*. And the right valiant Banquo...,
Whom you may say... Fleance kill'd,
For Fleance fled. (MAC 3.6.7)

(13) *Macbeth*. For the **blood-bolter'd Banquo** smiles upon me...
(MAC 4.1.123)

6. Anaphoraおよびその他の修辭用法

Repetitionの下位区分とされるanaphoraやhypallageの例も他の作品同様、用いられており、その状況は次のようである。

6.1. Anaphora

前回のMVのblank verse1,912行、rhymed verse51行、合計で1,963行中のanaphora（首句反復）の使用例46¹⁶⁾という発生率と比べると、今回のMACの方が2,004行とanaphoraの発生環境においては同等もしくは有利な状況にあるにも関わらず、12回という用例数から、極端に少ないことがわかる。その内訳は2回（2行の行頭で同語の使用）の例が10、3回（3行の行頭で同語の使用）が2例となっている。首句反復に用いられる要素としては、前置詞（With、For、Toなど）：3例、代名詞（I）：2例、接続詞（And、Though）：2例、冠詞（The）：2例、関係詞（That）：1例、名詞（We）：1例、文（This is the…）：1例といった具合である。ここでは頻度の高い3例を挙げるにとどめる。

(19) *Angus*. Whether he was combin'd
With those of Norway, or did line the rebel
With hidden help and vantage, or that **with** both
He labor'd in his country's wrack, I know not; (MAC 1.3.112-113)

(20) *Macbeth*. **Though** you untie the winds,...
Against the churches; **though** the yesty waves
Confound and swallow navigation up;
Though bladed corn be lodg'd, ...
Though castles topple on...
Though palaces and pyramids do slope
Their heads to their foundations; **though** the treasure
Of nature's germins tumble... (MAC 4.1.55-57)

(21) *Siward*. **The** tyrant's people on both sides do fight,
The noble thanes do bravely in the war,
The day almost itself professes yours, (MAC 5.7.25-27)

但し、用例数は少ないものの、(19)、(20)、(21)のいずれもanaphora自体は2回あるいは3回であるが、その前後も含めると(19)でも3回、(20)では計6回の反復が用いられていることがわかる。そしてこの3～6回の反復語の使用により、セリフにおける緊張感が増幅されているのはいうまでもない。

6.2. Hypallage

「いくつかの関連ある概念を列挙する際に、適切な対応語を分離させる」hypallage (代換法)¹⁷⁾ は本作品では4例見られる。

(22) *Malcolm*. The king-becoming graces,
As **justice, verity, tem'rances, stableness,**
Bounty, perseverance, mercy, lowliness,
Devotion, patience, courage, fortitude,
I have no relish of them,... (MAC 4.3.91-95)

(23) *Malcolm*. I am yet
Unknown to woman, **never** was forsworn,

Scarcely have coveted what was mine own,
At no time broke my faith, would not betray
The devil to his fellow, and delight
No less in truth than life. (MAC 4.3.122-128)

(24) *Gentle-woman*. I have
seen her **rise from her bed, throw her
night-gown upon her, unlock her closet, take
forth paper, fold it, write upon' t, read it,**
afterwards **seal it,** and again **return to bed;** (MAC 5.1.4-8)

(25) *Macbeth*. And that which should accompany old age,
As **honor, love, obedience, troops of friends,**
I must not look to have; but in their stead,
Curses, not loud but deep, **mouth-honor, breath,**
Which the poor heart would fain deny, and dare not.
(MAC 5.3.24-28)

(22) では 'king-becoming graces' が12、(23) では 'unknown' から 'no less...' に至るまで6回の否定要素が、(24) では9つの異なる動作、(25) では 'that which should accompany old age' の例として 'honor, love, obedience, troops of friends' という3つの徳、しかし実際にあるのは 'curses, mouth-honor, breath' という3つの悪徳、という具合に、3およびその倍数で対応語が配列されていることがわかる。

おわりに

本文で分析した韻律および修辭法に関する各項目の結果を簡単にまとめるならば、次のとおりである。

1. 魔女およびHecateのセリフに使用されているtrochaic tetrameterはMACにおいて50行ほど見られた。この強弱四歩格によってこれらの登場人物のセリフのリズムがシェイクスピアの通常のpentameterとは異なる響きで語られ、それによって上演の際も「魔女界」と「人間界」の区別が作り出されるという効用がもたらされる。もちろんこれは原語上演の場合に限られるわけだが、日本語のように英語とはまったく異なる音体系をもつ言語の翻訳でも「リズムの違い」が意識されるならば、より原作と翻訳の距離が近づくことになろう。

2. Simileとmetaphorについては、これまでの調査では触れずに今回初めて扱ったが、もちろん、これまでの研究で指摘されているようにMAC以外にも様々な作品で使用されている。しかしBrookが述べているとおり「重要な問題は、シェイクスピアの比喩がどこからきているかではなく、どのように使ったかである。この質問に答えるには、それぞれの劇のテキストの綿密な研究が必要である。」¹⁸⁾ その意味ではMACはsimileとmetaphorの宝庫といえる。そして「どのように使ったか」について本文において述べたように、‘hare’ vs. ‘lion’ のような逆説的な言葉の使い方や笑いを誘う使い方の他に ‘serpent’、‘snake’、‘scorpion’ など聖書の世界をイメージさせる教訓的なものも見られた。また ‘tomorrow speech’ における ‘walking shadow’ や ‘poor player’ など、じっくりと原作と向き合い、舞台上の役者のセリフの朗読に耳を凝らし、また読者として自ら音読することによってのみ味わうことのできるもので、それは人間の深淵な想像力の世界を提供してくれるものでもある。Simileとmetaphor各々 32例ずつが本作品では見られたが、他の作品との比較も今後の課題である。
3. Rhymeについては、他の作品同様、sceneとsceneあるいは次の新たな幕への転換を知らせる退場シーンで多く見られた。退場の直前で用いられる以外には、他の作品でも、たとえばMNDのヘレナの独白シーン¹⁹⁾ など登場人物の高揚した気持ちを表す場合や、あるいは歌の歌詞には rhymed verseが見られる。そういう意味では rhymeは特にMACにおける特徴的な使い方というわけではない。ただ魔女たちのtrochaic tetrameterと組み合わせて使用されていることにより、独特のリズム感を与えていることは確かであるといえよう。
4. Repetitionについては、188例のうち、2回の反復が全体の57.4%、3回が31.9%、4回が6.4%、以下5回～9回が残る1割という状況であったが、これを前回のOTHの場合と比較すると、単語・語句・文単位のいずれの場合も2回より3回の反復が多く見られたのに対し、(OTHでは3回の反復は207例中120例 (57.9%) 拙論紀要第13号) 今回は3回の例が全体に示す割合は3割、と減少している。また反復される要素としてはOTHでは文単位や前置詞句が多かったが、MACでは動詞句や名詞句の反復が半数を占める割合となっており、一方で文や前置詞による反復はわずかであった。しかし3回の反復例自体は減少したが、反復例全体の発生自体、OTHの3228行²⁰⁾ にくらべ、MACの全行数が2,146行という短さを考慮するならば、むしろ「反復」がより頻繁に用いられていると結論づけられよう。また3回の反復が反復全体の3割という数値も「反復例の10回のうち3回」とみるならば決して少ないとは言えない。
5. Alliterationについては本作品において49例が見られたが、発生率は前回のMV (2620行)、前々回のOTH (3228行) と比較すると、かなり頻繁に用いられているとい

えよう。また1行中に発生する頭韻の回数は2回が37例、3回が12例という発生率で、この割合はMVやOTHとあまり大差がない。また頭韻の発生環境は多い順に/s/：9例、/b/：7例、/d/：7例などで、これも他の作品におけるそれとほぼ同様であることがわかった。

6. Anaphoraの使用状況は前回のMVに比べるとかなり少ないという結果であった。発生環境としては、前置詞や接続詞、代名詞などが用いられ、ほぼMVやOTHと同じである。

総括として、次のことを述べて本論を終わる。「反復」と比喩、iambic pentameterに対するtrochaic tetrameter、blank verseとrhymed verseなど、セリフにリズムを与える重要な要素となっていることが再確認された。特に「反復」に関しては「三回」のくり返しが本作品でも多くみられ、‘three’はシェイクスピアにおける、そして英語と英文学がその成立に大きな影響を受けている聖書におけるマジックナンバー²¹⁾といえよう。いずれこのことをさらなる調査を積み重ねたうえでより明確にしたい。

Notes

- 1) 2008年(1H6)、同2009年(2H6)、同2010年(3H6)、同2011年(OTH)、同2012年(MV)などを参照。
- 2) 中尾 p. 220 参照。中尾は韻律分析を「詩行リズムを調べ、韻脚に分け、脚韻を調査すること」と定義している。
- 3) MAC 5.5.19-27でMacbeth自身によって三回の‘tomorrow’の繰り返しによって始まる有名な独白。
- 4) 英国劇団ITCLによるMACBETH学習院女子大学公演。(2012年5月26日)
- 5) これについては大場も著書において指摘している(大場 p. xvii)。韻律については中尾参照(p. 220)
また河合もこのシーンの他にMNDのEpilogueの例を以下のように挙げている。
Puck. If we shadows have offended,/ Think but this, and all is mended, (MND 5.1.424)
- 6) ここでは‘That will be ere the set of sun’の‘will be’は2音節とも「弱」で読むのが妥当であろう。あるいは‘will be’を‘w(i)lbe’のように1音節で、ということかもしれないが、First Folioでもスペルはこのままであることを付記する。
- 7) 研究社 NEW COLLEGE ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY 第6版参照。
- 8) *ibid.*
- 9) “serpent”については、Genesis 3:1～3:14, 49:17, Exodus 4:3, 7:15, Number 21:6～21:9, Deuteronomy 8:15, 2King 18:4, Job 26:13, Psalm 58:4, 140:3, 他旧約、新約合わせて53箇所、“scorpion”についても旧約・新約で合わせて9箇所の言及がある。Young, Concordance 参照。
- 10) Thompson, p. 10 参照。“This device of alluding to other stories ‘which poets write of’ is a very common way for Shakespeare to ‘heighten’ or enrich his own work...”
- 11) Schmidt, ‘creep’ 2) 参照。
- 12) 拙論、紀要第13号、pp. 190-191 参照。
- 13) Great Vowel Shift (大母音推移)の略称。両者はつづり字が示すように bloodは /blo:d/>/blud/>/blad/, また goodは /go:d/>/gud/のようにGVSの影響を受けて発音が変化したShaの時代はまだ完全にGVSが終わっておらず、現代英語に比べ両者がより近い発音として脚韻が成立したのであろう。
- 14) ‘Parison’ (類節並列)も「連続する複数の句や節が対応した構造をもつ修辞法」としてBrook 406.で紹介されている。

- 15) Penguin 版 (p. 31) では 2,133 行となっている。
- 16) 拙論、紀要第 14 号参照。
- 17) Brook, 402 及び三和他訳参照。
- 18) *ibid.*, 415 参照。
- 19) MND 1.1.226-251 参照。
- 20) 行数は Penguin books の complete works (p. 31) による。
- 21) 拙論でもこれまで度々論じてきたが、Brook 408 でも言及している。但し Brook は 3 つの連続は「英語、仏語、ラテン語」による言い換えであると述べているのみ。

参考文献

- Abbott, E. A. *A Shakespearian Grammar*. Macmillan. 1929.
- Brook, G. L. *The Language of Shakespeare*. Andre Deutsch. 1976.
- Booth, Stephen. *Shakespeare's language and the language of Shakespeare's time. Shakespeare and Language*. Edited by Catherine M. S. Alexander, Cambridge Univ. Press. 2004.
- Crystal, David & Ben. *Shakespeare's Words: a Glossary & Language Companion*. Penguin Books. 2003.
- Lyne, Raphael. *Shakespeare, Rhetoric and Cognition*. Cambridge University Press. 2011.
- McDonald, Russ. *Shakespeare and the Arts of Language*. Oxford University Press. 2001.
- Mr. William Shakespeare's Comedies, Histories, & Tragedies 1623*. Meisei Univ. Press. 1985.
- Palfrey, Simon. *Doing Shakespeare*. The Arden Shakespeare, Thomson. 2005.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. Vol. 2. Dover. 1971.
- Spewack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag, Hildesheim. 1973.
- The Riverside Shakespeare*. Edited by G. Blakemore Evans, Houghton Mifflin, 1974.
- The Complete Pelican Shakespeare*. Edited by Alfred Harbage. The Viking Press. 1969.
- Thompson, Ann. *Heightened Language, Reading Shakespeare's Dramatic Language, A Guide*. The Arden Shakespeare, 2001.
- Young, Robert. *Young's Analytical Concordance to the Bible*. Hendrickson. 1975.
- 中尾俊夫『英語発達史』篠崎書林. 1979.
- G. L. ブルック『シェイクスピアの英語』三輪伸治他訳 松柏社. 1998.
- 梅田倍男『シェイクスピアのレトリック』英宝社. 2005.
- 大場建治『マクベス』研究社シェイクスピア全集7 研究社. 2004.
- 青木敦男・古庄 信共編『藤原博先生追悼論文集－見よ野のユリはいかに育つかを』英宝社. 2007.
- 古庄 信『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry VI Part 1 に見る反復表現について』学習院女子大学紀要第 10 号、2008.
- 『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry VI Part 2 に見る反復表現について』学習院女子大学紀要第 11 号、2009.
- 『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Henry the Sixth Part Three に見る反復表現について』学習院女子大学紀要第 12 号、2010.
- 『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—Othello に見る反復表現について』学習院女子大学紀要第 13 号、2011.
- 『シェイクスピアの修辞法に関する一考察—The Merchant of Venice に見る反復表現について』学習院女子大学紀要第 14 号、2012.

Frequency Survey

Rhyme in MAC freq : 38 (ex) : rhyme used at 'exit' or 'exeunt' : 18

1	1.1.1-7	(8)	14	2.1.60-61	(2)	27	4.1.125-132 Witch	(8)
2	1.1.11-12 (ex)	(2)	15	2.1.63-64 (ex)	(2)	28	4.1.153-154	(2)
3	1.2.43-44 (ex)	(2)	16	2.3.145-146 (ex)	(2)	29	4.3.118-119	(2)
4	1.2.66-67 (ex)	(2)	17	2.4.40-41 (ex)	(2)	30	4.3.239-240 (ex)	(2)
5	1.3.8-9	(2)	18	3.1.140-141 (ex)	(2)	31	5.1.77-78 (ex)	(2)
6	1.3.11-16	(6)	19	3.2.6-7 (enter Mac)	(2)	32	5.2.29-30 (ex)	(2)
7	1.3.18-25	(8)	20	3.2.52-52/53 (ex)	(2)	33	5.3.9-10	(2)
8	1.3.30-31/32-33/ 35-36	(6)	21	3.4.134-139 (ex)	(6)	34	5.3.59-62 (ex)	(4)
9	1.3.35-56	(2)	22	3.5.2-31	(32)	35	5.5.50-51 (ex)	(2)
10	1.3.65-66	(2)	23	3.5.34-35	(2)	36	5.6.7-10 (ex)	(2)
11	1.3.81-84 (83 about/ 84 root)	(4)	24	4.1.4-42 Witch	(38)	37	5.8.33-34 (ex)	(2)
12	1.4.20-21	(2)	25	4.1.44-47 Witch	(4)	38	5.9.38-41 (ex)	(4)
13	1.4.48-53 (2×3) (ex)	(6)	26	4.1.110-111 Witch	(2)		Total :	(184)

Simile in MAC frq : 32 (as : 15 like : 16 of : 1)

1	1.2.8-9	as	12	1.7.21	like	23	3.4.110	like
2	1.2.15	like	13	1.7.45	like	24	4.1.19	like
3	1.2.19	like	14	2.1.6	like	25	4.1.42	like
4	1.2.25-26	as	15	2.1.56	like	26	4.1.115	like
5	1.2.35	as	16	2.2.51	as	27	4.3.53	as
6	1.3.79	as	17	2.2.61-62	of...	28	5.2.21-22	like
7	1.3.82	as	18	2.3.113	like	29	5.5.13	as
8	1.4.11	as	19	2.4.17-18	as	30	5.7.2	bear-like
9	1.5.62	as	20	3.4.21	as	31	5.8.25	as
10	1.5.65	like	21	3.4.22	as	32	5.9.14	as
11	1.7.19	like	22	3.4.99	like			

Metaphor in MAC frq : 35 w.s. : with simile : 4

1	1.2.54	Bellona's bridegroom	13	2.1.38	dagger of the mind	25	3.2.13-15	snake
2	1.3.58	the seeds of time	14	2.1.52-56	Tarquin's ... strides	26	3.2.23	
3	1.5.65	w.s. be the serpent	15	2.1.58-59		27	3.2.36	scorpions
4	1.6.5-6	heaven's breath	16	2.2.1-2		28	3.2.46-47	
5	1.7.22-23	w.s.	17	2.2.52		29		
6	1.7.25-28		18	2.2.57	Neptune's ocean	30	3.4.27	serpent... worm
7	1.7.33-35		19	2.2.58-59	w.s. this my hand ...incar	31	3.4.64	
8	1.7.35-37		20	2.3.112	silver skin...golden	32	4.3.52	black Macbeth
9	1.7.47-48		21	2.3.121-122		33	5.3.22-23	my...life...yellow leaf
10	1.7.65	wonder of the brain	22	2.3.140-141		34	5.5.24	Life...walking shadow
11	1.7.67-68	husbandry in heaven	23	2.4.5-6	w.s.	35	5.8.1-2	Play the Romans fool
12	2.1.4-5		24	2.4.7-10				

Alliteration in MAC frq : 39 ② : 37 ③ : 12

/s/ : 9 ; /b/ : 7 ; /d/ : 7 ; /l/ : 5 ; /g/ : 4 ; /f/ : 4 ; /m/ : 3 ; /t/ : 2 ; /j/ : 2 ; /p/ : 2 ; /au/ : 1

1	1.2.9	/m/	2	18	2.3.112	/s/	2	35	4.3.162	/g/	2
2	1.2.13	/g/	2	19	3.1.108	/b/	2	36	5.3.11	/d/	2
3	1.2.54	/b/	2	20	3.5.4	/tr/	2	37	5.3.15	/l/	2
4	1.3.38	/f/	2	21	3.6.7	/f/	2	38	5.3.22	/l/	3
5	1.3.88	/s/	2	22	4.1.10	/d/	2	39	5.4.1	/au/	3
6	1.3.94	/s/	2	23	4.1.12	/f/	2	40	5.4.3	/l/	2
7	1.4.41	/j/	2	24	4.1.13	/b/	2	41	5.4.6	/b/	2
8	1.5.42	/t/	2	25	4.1.19	/b/	3	42	5.4.7	/b/	2
9	1.5.70	/s/	3	26	4.1.20	/d/	2	43	5.5.20	/d/	2
10	1.6.26	/ð/	3	27	4.1.23	/m/	2	44	5.5.20	/p/	2
11	1.7.4	/s/	2	28	4.1.25	/d/	2	45	5.5.23	/d/	2
12	1.7.51	/m/	3	29	4.1.27	/g /	2	46	5.5.24	/p/	2
13	1.7.82	/f/	3	30	4.1.29	/t /	2	47	5.5.43	/l/	2
14	2.1.6	/l/	3	31	4.1.31	/d/	3	48	5.7.6	/ð/	3
15	2.2.18	/s/	2	32	4.1.40	/j/	2	49	5.9.38	/g/	2
16	2.2.19	/s/	3	33	4.1.123	/b/	3				
17	2.3.56	/s/	2	34	4.3.86	/s/	2				

Hyperbole in MAC frq : 4

1	1.2.38 Doubly redoubled
2	1.6.15 twice-double
3	3.4.26 twenty...
4	4.2.40 twenty...

Macbethにおける言葉の魅力について—韻律と修辭法の観点から

Repetition in MAC frq: 188 ②: 108 ③: 60 ④: 12 ⑤: 2 ⑥: 2 ⑧: 3 ⑨: 1

s (sentence) : 11 ; v (verb) : 24 vph (verb phrase) : 52 n (noun) : 24 nph (noun phrase) : 40 a (adjective) : 18
 adv (adverb) : 4 ; adv ph (adverbial phrase) : 3 ; prep (preposition) : 3 ; prep ph (prepositional phrase) : 9 ;
 int (interjection) : 14 ; onom (onomatopy) : 4 ; voc : 3 ; rel-cl (relative clause) : 1

1	1.1.11	2	s	64	2.3.7	3	onom	127	4.3.85	2	vph
2	1.2.28	2	int	65	2.3.12	3	onom	128	4.3.98-99	3	vph
3	1.2.56	2	nph	66	2.3.15	3	onom	129	4.3.100	2	int
4	1.2.56	2	nph	67	2.3.28	3	n	130	4.3.116	2	vph
5	1.3.10	3	s	68	2.3.32	9	s	131	4.3.122-123	2	nph
6	1.3.27	2	s	69	2.3.64	3	int	132	4.3.124	2	nph
7	1.3.30	2	n	70	2.3.75	3	voc	133	4.3.132	2	pron
8	1.3.35-36	3	adv ph	71	2.3.77	2	adv	134	4.3.138	2	a
9	1.3.47-49	3	int	72	2.3.78	2	voc	135	4.3.151	3	a
10	1.3.47-49	3	voc	73	2.3.83	2	s (v)	136	4.3.166	2	nph
11	1.3.62-64	3	int	74	2.3.98	3	nph	137	4.3.168	3	n
12	1.3.68-69	2	voc	75	2.3.99	2	vph	138	4.3.174	2	a
13	1.3.92	2	nph	76	2.3.108-109	3	a	139	4.3.191	2	a
14	1.3.98	2	adv ph	77	2.3.112-113	3	nph	140	4.3.196	2	nph
15	1.3.113	2	prep	78	2.3.129	2	n	141	4.3.204	3	nph
16	1.3.112-113	3	prep	79	3.1.1	4	n	142	4.3.211	3	n
17	1.3.115	2	v	80	3.1.5	2	n	143	4.3.216-218	4	a
18	1.3.123-125	2	adv ph	81	3.1.37	2	a	144	4.3.228-229	4	s
19	1.3.124-125	2	v ph	82	3.1.80	2	ncl	145	4.3.230-231	2	prep ph
20	1.3.131-	2	v ph	83	3.1.88	2	prep ph	146	4.3.236-237	3	nph
21	1.3.131-137	2	s	84	3.1.92-93	8	n	147	5.1.35	2	int
22	1.3.135-136	3	nph	85	3.1.95-96	5	n	148	5.1.36-37	2	int
23	1.3.139-140	2	nph	86	3.1.111	2	vph	149	5.1.44	2	a-ph
24	1.3.146	2	v	87	3.2.24-25	5	n	150	5.1.46	2	int
25	1.4.19	2	n	88	3.3.14	2	n	151	5.1.52	3	int
26	1.4.21	2	a	89	3.3.17	3	v	152	5.1.57	3	int
27	1.4.22	2	nph	90	3.4.23	4	a	153	5.1.66	2	prep ph
28	1.4.23-25	2	s	91	3.4.68	3	v	154	5.1.67	4	int
29	1.4.7	2	n	92	3.4.99-100	3	nph	155	5.1.68	3	prep ph
30	1.4.28-29	2	prep	93	3.4.121	3	n	156	5.1.71-72	2	nph
31	1.4.35-36	4	voc	94	3.4.124	3	n	157	5.1.74	2	nph
32	1.5.8-9	2	vph	95	3.5.30-31	3	vph	158	5.1.75	2	int
33	1.5.19-20	2	prep ph	96	3.6.13	2	nph	159	5.1.75-77	3	prep ph
34	1.5.20-22	3	adv	97	3.6.34-36	2 × 3	nph	160	5.1.78	2	nph
35	1.5.18-22	6	s	98	4.1.10	2	adv	161	5.2.1-2	3	prep ph
36	1.5.43-44	2	v	99	4.1.14	2	nph	162	5.2.4-5	3	nph
37	1.5.44	2	n	100	4.1.15	2	nph	163	5.3.14-15	3	nph
38	1.5.54	2	v	101	4.1.16	2	nph	164	5.3.24-25	4	n
39	1.5.54-55	3	voc	102	4.1.17	2	nph	165	5.3.27	3	n
40	1.5.64-65	3	prep ph	103	4.1.21	2	vph	166	5.3.32-33	3	nph
41	1.6.2	2	adv	104	4.1.52-58	6	conj	167	5.3.35-36	4	vph
42	1.6.6-7	4	n	105	4.1.71	3	voc	168	5.3.41-44	3	vph
43	1.6.8	2	n	106	4.1.77	3	voc	169	5.3.47-55	8	vph
44	1.6.9	2	v	107	4.1.90	3	vph	170	5.3.55	3	n
45	1.6.10	2	int	108	4.1.91	3	rel-cl	171	5.4.18	2	nph
46	1.6.13-14	2	vph	109	4.1.107-109	3	v	172	5.4.19-20	2	nph
47	1.6.16	2	a	110	4.1.142	2	vph	173	5.5.12	2	v
48	1.6.17	2	a	111	4.2.5	2	nph	174	5.5.19	3	n
49	1.6.23-24	3	nph	112	4.2.6	2	adv ph	175	5.5.23	2	int
50	1.7.1	2	v	113	4.2.6-7	3	nph	176	5.5.24	2	nph
51	1.7.1-2	2	s	114	4.2.12	2	s	177	5.5.25	2	v
52	1.7.5	2	nph	115	4.2.16	3	a	178	5.5.43-45	2	s
53	1.7.7-8	3	n	116	4.2.20	2	nph	179	5.5.45	2	int
54	1.7.13-15	4	nph	117	4.2.21	2	a	180	5.5.47	2	vph
55	1.7.17-18	2	a	118	4.2.27	2	s	181	5.5.50	3	vph
56	1.7.40	2	n	119	4.3.8-9	3	nph	182	5.6.2-5	2	s
57	1.7.81-82	3	n	120	4.3.16	3	a	183	5.7.12	2	s
58	2.2.7-8	2 × 2	n/v	121	4.3.22	2	a	184	5.8.20-22	3	v
59	2.2.24-29	4	adv Amen	122	4.3.31	2	v	185	5.9.16-17	2	s
60	2.2.32-33	3	n sleep	123	4.3.32-33	2	vph	186	5.9.25	2	int
61	2.2.32-40	3	v sleep no mo	124	4.3.48	2	a	187	5.9.39	3	n
62	2.2.50	2	nph	125	4.3.57-59	8	a	188	5.9.40	2	prep ph
63	2.3.3	3	onom	126	4.3.61-62	4	nph				

Anaphora in MAC frq : 12 ; ② : 10 ③ : 2

noun (pronoun) : 1 ; pron (pronoun) : 2 ; conj (conjunction) : 2
 prep : 3 ; s (sentence) : 1 ; art (article) : 1 ; rel (relative) : 1

1	1.3.112-113	prep. With	2
2	1.7.7-8	n. We	2
3	3.1.64-65	prep. For	2
4	3.4.61-69	s This is the...	2
5	4.1.40-41	conj. And	2
6	4.1.55-57	conj. Though	3
7	4.1.147-148	art. The	2
8	4.2.70-71	prep. To	2
9	4.2.74-75	pron. I	2
10	4.3.38-39	pron. I	2
11	5.7.25-27	art. The	3
12	5.8.20-21	rel. That	2

Hypallage frq : 4

1	4.3.91-94	The king-becoming graces>justice, verity... fortitude	9
2	4.3.125-130	I am yet /Unknown... never...Scarcely...delight/No...	6
3	5.1.4-8	I have seen her rise...throw... return	9
4	5.3.25	old age>honor, love, obedience, troops of friends	4

Hendiadys frq : 1

4.1.48 (black and midnight hags)

Parison frq : 1

3.5.30-31

Trochaic tetrameter (by Witches) frq : 4

1	1.1.1-7	7
2	1.1.11-12*	2
3	1.3.1-3**	3
4	4.1.1-38	38

全てWitchesのセリフ *1.1.12はTrochaicだがPentameter. **1.3.2-3で1行分、1.3.4からIamb. Pentameterに移行。

Cf. 3.5.1 (Witch 1) および3.5.2-35 (Hecat) はIamb. Pentameter.